

The 9-th International Conference “Nuclear Power Safety and Nuclear education” 参加報告

期日 : 平成 17 年 10 月 22 日 ~ 10 月 30 日

出張者 : 原子核工学専攻博士後期課程 1 年 若菜 俊一

出張先 : オブニンスク原子力工科大学(OINPE), オブニンスク、ロシア

2005 年 10 月 24 日から 28 日の 5 日間にわたり、モスクワの南西約 100km に位置するオブニンスク市のオブニンスク原子力工科大学にて「第 9 回原子力安全と教育に関する国際会議」が開催され、COE-INES 支援のもと東工大教員・大学院学生が参加した。今回の会議への参加は平成 17 年 2 月 2 日に COE-INES、原子炉工学研究所、オブニンスク原子力工科大学の三者による国際協力活動に関する覚書に基づくもので、詳しくは下記 URL を参照していただきたい。

(<http://www.nr.titech.ac.jp/coe21/events/news-log.html>)

オブニンスク原子力工科大学 (OINPE) は旧ソ連における核物理、原子炉物理、そして原子炉工学の分野での産業発達を目指し上記分野でのスペシャリストを輩出するため 1953 年に設立された。原子力産業が過去と比べて落ち着いてきている現在、大学では原子力工学における「教育」という分野で革新が求められている点では日本でもロシアでも同じであることを本会議に参加することで納得した。またオブニンスク原子力工科大学は工学という分野にとらわれず、放射線治療などの医療の分野などを組み込むことで学生獲得に力を入れているという。

会議はロシア語で行われ、外国人側は英語への同時通訳を通して進行された。初日は Plenary Session が行われ、関本教授や斉藤助教授が発表を行った。会議室の広さにくらべて参加者数は決して多いとは言えなかったものの、ロシア側の質疑応答は非常に盛んであり、この会議が英語ではなくロシア語で行われた理由がよく解った。二日目からは分野ごとに分かれて会議が行わ



写真(1) Plenary Session が行われた会場

れた。あらかじめ貰っていたプログラムどおりに会議が進行せず、発表する時間や教室が異なるなど最初は非常に戸惑った。これは同時通訳のための機材を設置する関係で教室や時間帯が変わってしまったのか、それともこれはロシア人にとっては普通なのか判らないが、どのような状況になっても冷静に対処している姿を見て、ロシア人の柔軟な思考を感じることができた。そして、この日は私も発表を行った。今回は”Comparative Study of Different Calculation Method for Double Heterogeneity in HGTR”というテーマで発表を行ったが、国際会議で初めて口頭発表を行うという緊張と、同

時通訳付きという初めて体験する状況であったため十分に研究内容を伝えることが出来なかった。今回の反省点は早急に克服したい。三日目は二日目と同様な内容であったが”Nuclear Education”という分野のセッションがあり、私は原子力の教育に興味を持っていたので参加した。しかし、言語に加えてスライドもロシア語であったため、得られる情報は全て通訳者からの英語だけという状況は非常に集中力を必要とした。

四日目は午前中に閉会式を行ったあと、Facility Visit として物理工ネルギー研究所（Institute of Physics and Power Engineering：IPPE）を訪れ世界最初の原子力発電所を見学した。原子炉の規模は現在と比べて狭く、また炉心全体図も見ることができ、配管の数が多かったのが印象的だった。オペレーター室にも入ることができたが、監視人が一人しかいなかったため閑散としていた。しかし、これが 1954 年には運転していたのには驚きであった。

五日目は”Russia-Japan International Research Cooperation and Nuclear Education Toward Innovative Nuclear Energy Systems”と題して第一回ワークショップが行われた。このワークショップの午前中は初の試みとなるインターネットビデオシステムを用いて日本とロシアで同時にワークショップを行うというものであった。我々ロシア側は画像も音声も鮮明であったが、帰国後、ワークショップに参加した学生に感想を聞くと、日本側では音声ははっきりとしていたが画像が途中でブレてしまうことがあったという。しかし、今回の試みは大きな成果を残し、お互いの発表の仕方に工夫さえすればビデオシステムを通した会議の同時進行も非常に有意義であると実感した。

今回の国際会議はオブニンスク原子力工科大学との国際協力活動をより緊密なものへ進展させるという目的もあり、お互いの活動内容及び状況を十分に理解してもらう必要があった。五日間にわたる会議とワークショップでそれらの目的は十分に達成されたと思う。この繋がりを活かしてオブニンスク原子力工科大学と東工大原子炉研の国際交流をより親密なものにしていきたい。このような国際交流の発端ともなる国際会議に参加させていただき、また私にとって大きな経験を与えてくださった東京工業大学原子炉研 COE-INES プログラムに心より感謝いたします。



写真(2) 筆者発表の様子



写真(3) ワークショップの様子